

平安時代における緑釉陶器の生産・流通と消費

尾張産を中心に

尾野善裕

Green-Glazed Ceramics: Production, Distribution and Consumption in the Heian Period: Centering Production of the Owari District

はじめに

- ① 研究史の整理と問題点の所在
- ② 考古資料にみる緑釉陶器の生産・流通・消費と官
- ③ 文献資料にみる緑釉陶器の生産・流通・消費と官
- ④ 九世紀の尾張における緑釉陶器生産体制
まとめ

【論文要旨】

平安時代の国産緑釉陶器をめぐる過去の研究では、考古資料に対する歴史的評価や、文献資料の解釈が論者によって大きく異なっている。それにもかかわらず、緑釉陶器が多く出土する遺跡は、官衙かそれに準ずるような〈公的施設〉である、となぜか漠然と信じられているように見受けられる。

しかし、実際の出土事例を検討してみると、地方では、国衙など官衙近辺での緑釉陶器の出土は少なくないが、必ずしも政庁など官衙中核部からの出土が多いわけではないことが判る。また、平安京とその近郊で、九世紀代の緑釉陶器が多く出土するのは、冷然院・嵯峨院・淳和院など天皇家関係者の邸宅跡であり、これらは厳密な意味での〈官〉に属するものではない。むしろ、これらが私的邸宅と評価すべき性格のものでもあることを考慮すると、そこで使用されていた緑釉陶器についても私的奢侈品である可能性が考えられる。

一方、緑釉陶器生産工人の官人登用を示すものとされている「日本後紀」の弘仁六年条や、緑釉陶器の貢納規定である「延喜式」の年料雑器条などの文献資料も、それ自体が、〈官〉による緑釉陶器生産の直接経営を証明するものではない。

こうした検討結果を踏まえた上で、改めて考古資料を眺めてみると、尾張地域の窯跡から、「淳和院」と記された緑釉陶器生産に関わる窯道具が出土していることが注目される。この窯道具の存在は、緑釉陶器の中に、生産段階から私的経済活動体である〈院〉への供給を前提とされていたものがあることを示しており、官営工房以外での緑釉陶器生産の存在が推測されたとともに、淳和院などの〈院〉自体が、その経営母体であった可能性も考えられよう。